国際農業工学　レポート

・八田與一の精神

八田與一は、１８８６年、現在の石川県金沢市に生まれた人物で、台湾の嘉南平野における水利事業の指揮者としての功績が知られています。

八田が先の水利事業にあたった２０世紀前半、台湾は日本の統治（という言葉を遣うのであればそれ）の下にあり、台湾総督府が置かれていました。その内務局土木課に、大学卒業ののち技手（技術職の官吏）として就職した八田は、２８歳の若さで桃園における水利工事を成功させました。高い評価を受けた八田は、その功績を認められ技師（官吏の内の高等官）に昇任します。

その後八田は、新設する水利工事の計画調査のための苦労を厭わず、度々田舎や山地に赴き、そしてとりかかることになったのが冒頭の嘉南平野での事業だったということです。

この地域は、降雨の少なさや、年間でみたときの雨量の偏り、平坦であるための排水の悪さなどが相まって、洪水や干ばつに苦しむ貧しい土地でありました。八田は、５０万の農民が暮らすその嘉南平野１５万 ha において巨大な灌漑・排水の設備を整え、二つの川から取水することで、地域の灌漑問題が一挙解決し更には塩害発生地域の土地改良もできるとの判断から、この大事業の計画を打ち立てることになります。実際の工事の規模は、当時の日本の最大ダム工事であった愛知用水工事の２倍以上で、工事自体に１０年間、調査設計から着工まででさえ４年間かかり、総事業費は５４１３万円（現在の５兆円とも考えられる）という大変なものでした。

八田の開発に対する思いは強く情熱的で、そのことをよく伝えるエピソードも多く知られています。例えば、嘉南平野での建設工事は、プラン作りは官僚であっても施行・運営するのは民間団体という形式が取られ、そのため嘉南において水利組合が組織されましたが、八田はこの工事に専念するため総督府の職を辞して組合付きの技師となった、ということがあります。

実際のダム工事においては未だなお独創的とされる工法を施したり、資金難が生じた際には「彼らには再就職が可能だ」として苦しみながらも優秀な者から解雇したりと、挿話には事欠かない八田ですが、農業開発に携わる際に求め

られる心をよく伝えるものとしては、「三年輪作」の話が知られています。

実は、完成する巨大ダムをもってしても、広大な地域全体で必要とされる水量の３分の１程しか供給できないことがわかっていました。しかし、一部の地域にのみ発展がもたらされることを八田は許さず、そうして打ち出されたのが三年輪作の案です。これは、各地域での給水を、毎年ではなく３年に一度順番に行うものとし、用水の必要な稲・それほど必要でないサトウキビ、ほとんど必要ない芋を一年ごとに各地域で順番に栽培することで、地域全体の用水不足を解消するものでした。

ここには、単に仕事をこなすことを大きく超えた、信念のようなものが感じられます。場合によっては、一部地域であろうともきちんとした発展を遂げさせ、そこから広げるやり方こそが適している、という議論もあるかもしれません。しかし、八田にとってそれは、正しい事ではなかった。台湾という地での健全な社会形成を、更にはその将来のことまでを考えた上で、嘉南における平等を追求したのです。かくして、嘉南の地域は一大生産地となり、水利事業の組合員の負担費用も回収されるものとなりました。

強固な信念は、時として間違った結果をもたらすこともあることは、歴史上よく知られています。しかし、農業開発といった形で、一つの社会変容をもたらす上では、様々な意味で莫大なエネルギーが必要であり、その一つはやはり人の強固な信念なのではないか、と考えます。しかし、信念にも誤るもの・正しいものがあるとしたら、その分別をどうつけるのか。

私は、そのヒントは現地の人の幸福を真剣に考えることにあると感じています。八田の場合では、現地の人々が彼の死を悼み、銅像や墓をつくり、戦後に対日本圧力が強まった中でもその像を守り抜いたという事実から、彼の信念が正しかったと言えるか、わかるように思います。

参考資料（全てオンライン資料・最終閲覧日は２０１５年４月２７日）

文献にみる補償の精神 http://damnet.or.jp/cgi-bin/binranB/TPage.cgi?id=247
財團法人紀念八田與一文化藝術基金會 http://hattayoichi.org.tw/
国際留学生協会 http://ifsa.jp/index.php?kiji-sekai-hattuta.htm
（その他用語の確認などに適宜「フリー百科事典ウィキペディア」を用いた）